

## 1. 集計表の分析

### アンケート記入者のあらし

#### A 年齢

10代…1人(0.1%)・20代…331人(31.9%)・30代…650人(62.7%)・40代…42人(4.0%)・50代以上…10人(1.0%)・未回答…3人(0.3%)、合計1,037人である。

40代42人がすべて子どもの母親なのか、中には年若い祖母も含まれているか否かはわからない。また50代以上の10人は多分、子どもの祖母(あるいは祖父)なのであろう。

#### B 性別

記入者総数1,037人のうち男性は23人(2.2%)、女性は1,008人(97.2%)、未回答6人(0.6%)であった。

#### C 職業

フルタイム…106人(10.29%)、パートタイム就労…137人(13.2%)、自営業…52人(5.0%)、無職…729人(70.3%)、未回答…13人(1.3%)となっている。

フルタイムは産休か育児休業中なのであろうか。また自営業や無職の中には、保育園への入園を希望している待機児の親もふくまれているのかもしれない。

#### D 配偶者の職業

フルタイム…847人(81.7%)、パートタイム就労…12人(1.2%)、自営業…106人(10.2%)、無職…17人(1.6%)、配偶者なし…43人(4.1%)、未回答…12人(1.2%)となっていた。

### 設問(問1～問10)ごとの集計結果について

#### 〔問1「催しを知った手段」について〕

全体では「保育園の園だより」(31.8%)が最も多く、次に「知人などのクチコミ」(29.8%)、以下「市町村の広報紙」(14.9%)、「案内のチラシ」(11.5%)、「その他」(7.5%)となっており、「ポスター」はわずか2.7%であった。私の古い考えでは、宣伝方法としては、まずポスターと思っていたのであるが、〈保育所コード〉のNo1～13の中で、ポスターなど初めから考えていなかったと思われる所が半数以上であった。また、市町村の広報紙で催しを知った人が多かった所はNo2(57.1%)、No5(31.3%)、No12(30.3%)である。更に「案内のチラシ」によるものはNo1(31.3%)、No9(24.6%)が目立った。

「保育園の園だより」で知らされた人々のうち、No2とNo12(4.9%)を除けば2桁台で、No4(66.7%)、No13(66.7%)、No3(61.0%)が目立って多い。

そして「知人などのクチコミ」によるものはNo3(2.9%)、No13(9.5%)以外の多くの所(No10の68.9%を最多とする)で高い数値を示していた。20代、30代の若い母親達、そして無職の人(つま

り専業主婦なのであろう)、自営業の母親達には、この集計結果で見ると、「知人などのクチコミ」が情報源として有効なものとなっているようだ。

〈年齢〉で見ると、「保育園の園だより」で知った人が 50 代で 70.0%、40 代では 47.6%となっている。また「市町村の広報紙」によって知った人の割合も、この年代の方が 20 代や 30 代よりも多かった。年代によっては情報の媒体に違いがあるようだ。

#### 〔問 2 「子育てサークル(グループ)に所属していますか」について〕

全体では「はい」37.9%、「いいえ」61.2%、未回答 0.9%となっている。

〈年齢〉で見ると、「はい」の答は 20 代 38.7%、30 代 38.8%、40 代 26.2%であった。

〈性別〉では女性の 38.8%が、男性では 4.3%が子育てサークル(グループ)に所属していた。

〈記入者の職業〉では無職の 47.5%、自営業の 26.9%、パートタイム就労の 13.1%、フルタイムの 10.4%の順で子育てサークルに所属している。

〈保育所コード〉では「はい」が最多数なのは No4 の 75.0%、最少は No3 の 6.7%である。

〈配偶者の職業〉で見ると、フルタイムの 41.1%が最多で、次いで自営業の 35.8%、無職の 17.6%、パートタイム就労 8.3%、配偶者なし 7.0%の順であった。数としては少ないがひとり親の 93.0%が「いいえ」と回答しているのが気になる。時間的にゆとりがないのか、それとも子育てサークルに入りにくいものがあるのだろうか。

#### 〔問 3 「育児講座(子育て教室)などへの出席の有無」について〕

全体では「はい」が 43.7%、「いいえ」が 55.5%、未回答 0.8%であった。

〈保育所コード〉では No4 の 67.6%が最も多く、No6 の 20.6%が最少である。これは地域性によるものなのか、当該保育所が実施した子育て支援活動の内容によるものなのかどうかはわからない。

〈年齢〉では 40 代 54.8%が最も多く、50 代 50.0%、30 代 46.3%、20 代 37.2%の順であった。講座出席が必要と思われる 20 代の数値が低いのは、時間的に余裕がないのか、あるいは関心が薄いのかはわからない。

〈性別〉においては女性の 43.8%が、男性では 30.4%が育児講座に参加している。

〈記入者の職業〉では無職の 45.0%が高く、パートタイム就労 43.1%、自営業 40.4%と少なくなつて、フルタイムの 36.8%が最も低い数値を示していた。講座への関心の度合い、というよりも時間的ゆとりの有無による違いかもしれない。

〈配偶者の種類〉では、フルタイム 45.8%が「はい」と回答しており、配偶者なしの 79.1%が「いいえ」の回答であった。

#### 〔問 4 「育児について保育園に相談したことがありますか」について〕

全体を見ると「はい」は 19.1%、「いいえ」は 78.8%、未回答 2.1%であった。平成 10 年 4 月より保育所は地域住民の育児についての相談を受ける努力義務を課せられている。この数値を低い

と見るか、妥当なものとするかはここでは判断しかねる。

〈保育所コード〉で見ると、No5の33.9%が最多で、No7の10.2%が最少である。各保育園の支援活動の内容や、その地域内に子育て相談についての社会資源が豊富ならば保育園への相談は少なくなることも予想される。

〈年齢〉では30代の19.7%、20代18.4%、40代16.7%の順で相談している。

〈性別〉では男性21.7%で、女性の19.0%を上まわる数値を示していた。このアンケートを記入した男性たちには、保育園が相談の拠り所の一つとなっているようだ。

〈記入者の職業〉ではフルタイムの28.3%が相談しており、無職は16.6%とパーセンテージの上では低いが、実人数で見ると、無職の総数729人中121名が育児の相談を保育園にしていた。

〈配偶者の職業〉では「保育園に相談したことがある」との回答の最多数はパートタイム就労の33.3%であり、最も少ないのはフルタイムの18.2%であった。

そして相談の方法についての質問では、電話相談25.8%、面接相談74.2%がその答である(以上、全体を指す)。これを〈保育所コード〉の実人数で見るとNo5が最も多く、39人が相談を依頼しており、その方法はおよそ2割が電話相談で、8割が面接相談である。

実際に育児相談をするとき、保育園の場合は電話相談のかたちで始まっても、来園してもらえば単なる面接相談以上に様々な情報を直接提供できることが強みである。

〈年齢〉では30代の128人(電話23.4%)、20代61人(電話31.1%)、〈記入者の職業〉では無職121人(電話27.3%)、〈配偶者の職業〉ではフルタイム154人(電話26.0%)が目立っている(以上、〈年齢〉～〈配偶者の職業〉まで人数は実人数、電話相談のパーセンテージは実人数での比率である)。

#### 〔問5「あなたの地域では、団地等における助け合い保育を実施していますか」について〕

全体では「はい」5.6%、「いいえ」30.7%、「わからない」58.7%、未回答5.0%であった。

〈保育所コード〉を見ると、「はい」の数値が最も多いのはNo11の12.2%で、最少はNo3の1.0%である。

〈年齢〉では40代11.9%が最も多く「はい」と回答している。〈性別〉では女性の5.8%が、〈記入者の職業〉ではフルタイムの8.5%、〈配偶者の職業〉でもフルタイムの6.3%が「はい」と答えていた。

この設問で言う「助け合い保育」とはどのような内容なのであろうか。単に知人同士がお互いの子どもを預け合うものを言うのか、あるいは団地の自治会等で組織的に助け合うことなのであろうか。

私の乏しい知識では、生活協同組合で子どもを持つ会員が登録しておき、必要な都度、都合のつく会員が子どもを預かるという互助組織を持っているという事を聞いている。また旧労働省の施策にファミリーサポートセンターの制度があり、北九州市での実施例を研修会で学んだことがある。これらがうまく機能すれば、子育て中の家庭には有難い方法なのであるが、このアンケートの回答状況から見ると、助け合い保育の普及はまだまだなのであろう。

**〔問 6 「あなたの地域では、ベビーシッターを利用している子育て家庭がありますか」について〕**

全体で「はい」はわずかに4.4%、「いいえ」が24.2%、「わからない」71.2%、「未回答」0.2%という結果であった。

〈保育所コード〉によれば No8 の10.4%が最も高い数値で「はい」と答え、No6 及び No9 の所では「いいえ」と「わからない」を合わせて100%を示していた。

〈年齢〉では50代以上10.0%、〈性別〉では女性の4.5%、〈記入者の職業〉ではフルタイムの9.4%、〈配偶者の職業〉ではフルタイム及び配偶者なしが共に4.7%が「はい」と答えている。

ベビーシッターの普及はまだ進んでおらず、料金が低いこともあって、ごく一部の大手企業が社員の福利厚生的一端として、費用を一部負担するということもあるが、一般家庭にはまだ馴染んでいないということであろう。

**〔問 7 「あなたの地域には子育てのボランティアがいますか」について〕**

全体では「はい」9.5%、「いいえ」15.2%、「わからない」74.9%、未回答0.4%となっている。

〈保育所コード〉では No4 の19.4%が「はい」の最多数であり、0%は No2、No9、No13 の3か所であった。

この設問では前問同様、「わからない」という回答が〈年齢〉、〈性別〉、〈記入者の職業〉、〈配偶者の職業〉の各項目共に多数であった。

子育てボランティアとは、実際にはどういう人を指すのであろうか。夏休み中に保育園を訪れる中学生や高校生のボランティアも子育てボランティアと呼べなくはない。

保育園での育児支援活動を手伝って下さる旧保育園職員や父兄、老人クラブの人達など、どの地域にも必ず誰かいる筈だと思う。

この設問の意味が記入者にわかる文言なら、回答の中身が少し違ったものになったのではないだろうか。

**〔問 8 「子育てへの社会の関わりについて、あなたの考えに近いものはどれですか」について〕**

「子育ては家族だけの問題である」を A、「最低限、必要な福祉制度があればよい」を B、「近所付き合いなどの人間関係が子育てには必要である」を C、「福祉制度などを中心に、社会が幅広くサービスを提供すべきである」を D、と以上4項目を記号化した上で、述べてみる。

まず全体では A→0.6%、B→5.7%、C→61.9%、D→51.6%という数値であった。

更に4項目の中で C(近所付き合いなどの人間関係が子育てに必要な)を自分の考えに最も近いとした記入者が最多数であったが、その中身を見れば、〈年齢〉では50代以上の90.0%が、〈性別〉では女性の62.3%(男性47.8%)が、〈記入者の職業〉では自営業の65.4%が、〈配偶者の職業〉でも自営業の65.1%が選択していた。

次いで多かった D(福祉制度などを中心に社会が幅広くサービスを提供すべきである)については、〈年齢〉では20代53.8%が最も数値が高く、年代が上がるにつれて低くなる傾向がある。〈性別〉では男性が69.6%と女性(51.2%)よりも高く、〈記入者の職業〉ではフルタイム58.5%が最多、

〈配偶者の職業〉では無職のパーセンテージ(58.8%)が高かった。

また子育てには「最低限必要な福祉制度があればよい」とする自己責任型とも呼べるBについては、〈年齢〉では40代(11.9%)、〈性別〉では女性(5.7%)、〈記入者の職業〉はパートタイム就労(11.7%)が、〈配偶者の職業〉ではフルタイム(25.0%)が多かった。

#### 〔問9 「あなたは普段、子育てについてどのように考えていますか」について〕

全体では「生きがいを感じる」16.7%、「楽しみや喜びを感じる」80.1%、「義務や責任を感じる」37.7%、「負担や苦勞を感じる」17.1%、未回答 1.3%であった。

以上4つの考え方を(i)年齢、(ii)性別、(iii)記入者の職業、(iv)配偶者の職業によって最もパーセンテージの高いものを挙げていくと、次のとおりであった。

「生きがいを感じる」→(i)50代以上、(ii)男性、(iii)フルタイム、(iv)自営業である。

「楽しみや喜びを感じる」→(i)20代、(ii)女性、(iii)フルタイム、(iv)自営業となっている。

「義務や責任を感じる」→(i)40代、(ii)男性、(iii)フルタイム、(iv)パートタイム就労である。

「負担や苦勞を感じる」→(i)40代、(ii)男性、(iii)無職(つまり専業主婦)、(iv)自営業である。

子育ては乳幼児期は成長していく喜びが大きいので、20代で楽しみや喜びを感じ、30代、40代では楽しみや喜びだけでなく、子どもが中学生、高校生、やがて大人になるにつれて、心配や責任の量・質共に増していくので負担や苦勞を感じる、ということであろうか。

そうした時を通り過ぎて50代に達する頃には、生き甲斐を感じるが増えていくという集計表の読み方は早計過ぎるだろうか。

#### 〔問10 「子育て上、困ったことが起きたときどのように解決しますか」について〕

この設問での回答は主なもの3つを選択してもらっている。全体で頻度の高いものから挙げていくと次のとおりである。

1. 家族に相談→86.8%、2. 友人・知人に相談→78.2%、3. 育児書→33.8%、4. 保育園に相談→20.8%、5. 病院に相談→12.2%、6. 保健所に相談→8.7%、未回答→0.6%。

以上を記入者の〈年齢〉〈性別〉〈職業〉〈配偶者の職業〉の4点から眺めてみた。

第1位の「家族に相談」と、第2位の「友人・知人に相談」が唯一逆転するのは〈配偶者の職業〉が無職だけで、他はすべて「家族」が1位であった。

第3位の「育児書」については40代、〈記入者の職業〉がフルタイム、パートタイム就労、自営業、そして〈配偶者の職業〉がパートタイム就労及び自営業が第4位となっている。

第4位の「保育園に相談」では50代以上、〈記入者の職業〉では自営業、〈配偶者の職業〉ではパートタイム就労が多かった。全体の20.8%であっても、園児の保護者ではない人たちが「保育園」を相談先として選択していたのは、喜ばしいことであると思う。

(山城清子)